児童理解に基づく授業改善
－道徳教育を通して－

所属校：西東京市立田無小学校
氏　名：中　　島　　孝
派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：児童理解・学習意欲・道徳教育

Ⅰ　研究の目的

本研究は、「児童の学ぶ意欲を引き出すためには学習環境を整えることが大切である」と考えたところから出発した。まずその問題意識の背景を概説したい。学習指導要領の改訂において「生きる力」を育むことが引き継がれ、児童の発達段階を考慮して「知・徳・体」の調和のとれた育成を重視することが示された。「生きる力」を育むことは、児童自らが学ぶ意欲や意志をもち知識を習得し、社会や公共のために活用し、探究心をもって学ぼうとすることにつながる。その基盤としての道徳教育の充実は重要な課題であると考える。教育は、教師と児童との人格の触れ合いがその前提となる。中でも道徳教育は教師と児童の信頼関係や、児童相互の好ましい人間関係が確立された学習環境がなければ実質的な効果は期待できないとされている。

そこで、児童が学ぶ「学習環境」の中で、大きな役割を果たすのは教師であるとの考えに立ち、「児童理解」に基づいた授業改善をおこなうための一つの方向性を道徳の時間を要とした道徳教育を通して探り、その手だてを示すことを目的として本主題を設定した。

Ⅱ　研究の方法

研究は教職大学院での研究・学習を通して実施したが、特に本研究のために以下１，２、３の研究方法を採用した。

１　学ぶ意欲を育てる学習環境の意識調査

「学習環境」と「学ぶ意欲」のかかわりに関してこれから教師を志す学生のとらえ方を明らかにするため、インタビュー調査を行い、集計し、意識の傾向性をまとめる。

⑴ **調査対象者**；教師を志す大学生４０人

⑵ **調査方法と調査項目**；大学の階段に「かけ算階段」を設定しその階段を上がってきた学生に以下の項目を聞き取り調査する。

① 「かけ算階段」は、子供の学ぶ意欲を育てる学習環境になると思いますか。

② かけ算九九のほかにどのようなものを貼ると子供の意欲を引き出せると思いますか。

③ 子どもの学習意欲を育てるために大切なことはどんなことですか。

⑶ **集計と分析**

調査結果を集計する。本主題にかかわる項目③については意識の傾向性を研究の基礎とする。

２　先進校の研究

⑴ 大正自由教育が盛んに行われた時代より子どもを学習の主体とした自発性、自律性に基づく教育の在り方を実践し続けている小学校の視察を通して児童理解に基づく授業のあり方について学ぶ。

⑵ 先進校での学びを生かし、連携協力校で授業実践を行う。

３　道徳教育に関する理論、実戦的研究

児童理解に基づいた道徳教育の在り方について、理論研究と共に連携協力校において実践的に探究し、道徳的実践力を高めるために有効と思われる学習過程について構想する。

Ⅲ　研究の結果

１　意識調査の結果

本主題にかかわる項目③の調査結果から以下のことが明らかになった。

⑴「楽しい」「自発的」「生活の中で」「疑問を持つ」などの言葉がキーワードになっていた。つまり、子どもの内発的な動機を大切に考えている学生が多いことがわかった。

⑵「熱意ある教師」、「先生の人柄」、など教師と「子供とのかかわり」が学ぶ意欲に大きな影響を与えていると考えている学生が四分の一を占めた。

⑶「成功体験」、「ほめて伸ばす」、「点数で評価しない」など児童の自尊感情を高めることを大切にしたいと考えている傾向もうあるように受け取れる。

以上のことから考察すると、「学ぶ意欲」を育てるためには、児童による自発的な学習課題の設定と、教師と児童のかかわりを大切にしようとしていることがわかった。

２　先進校での学び

⑴ **児童理解の視点**

先進校の教師による学校での児童理解は主に「朝の会での発言」「日記」「学習中での発言」「学びの振り返

り」「生活の様子」であった。これらのことは研究対象である小学校に限らず多くの学校で教師が実践しているところである。しかし、私が学んだことは、児童を理解するための視点の違いである。児童を学習者ととらえ、児童相互の学びを深める話し合いを中心とした問題解決学習が行われている。その小学校の教諭によれば「『この子は、すごい！』『この子は、おもしろい！』などと思わされた場面を拾うことに努めることによって、子どもを見る力量を鍛えていかなければならない。」としている。このことから、学習のねらいを達成するためや、児童の学習のつまずきを知るためだけでは見逃してしまうことも含め、児童のすべてを受け入れて理解しようとする姿勢がうかがえる。児童の学びは算数とか国語とか道徳であるとか別々に学んでいるのではなく相互に関連して学びが深まっていくのである。教師による児童理解も同じように、場面ごとで捉えるのではなく相互に関連させながら一人の人間として理解していこうとする姿勢が大切であることを学んだ。

(1) 連携協力校での授業実践

① 授業実践の目的

児童理解の視点を明らかにし、授業改善の方向性を探る。

② 授業実践からの考察

ア 事前に道徳の時間の授業を行ったことや、児童との対話を繰り返し行うことで児童理解を図ってきた。

イ 児童と相互に理解し合うためには生活に根ざした会話が有効であると感じた。

ウ 児童の学びの思考は生活経験に根ざすことで学ぶ意欲が高まる。

エ 児童中心の問題解決的な学習形態は、児童のこだわりが教師の意図するところから離れてしまうことが多いので、計画どおりに進みにくい。

③ 児童理解の視点

児童理解は、生活に根ざしたところで教師と児童、児童相互に理解し合うことが、学ぶ意欲の向上にもつながる最も重要な視点である。

④ 授業改善の方向性

VTR や、録音機等で授業を記録し、授業を振り返る授業リフレクションは、児童の理解が深まり、授業を改善する一つの手立てになる。

3 問題解決学習的な道徳の時間を創造する

問題解決学習を、道徳の時間の中で行うことは、児童の生活経験と道徳的な価値の結びつきを深めることにつながり、道徳性を育み道徳的実践に結びつくことになるのではないだろか。そのために教師は日々の授業実践を通し児童理解を深め更新していくことがより大切になる。

(1) 問題解決的な道徳の時間の課題

① 持ち上がりの学級でない場合、児童理解が不十分なため児童の課題に応じた学習計画を立てることが難しい。

② 各教科、領域との関連に合わせた年間指導計画が立てにくい。

③ 児童の問題意識と内容項目が重なり合わない可能性が出てくる。

(2) 道徳の時間の指導過程案

① 問題意識を提起した作文を読む。

② 提起された問題について自分の感想を書く。
書いた感想を基に話し合いを行う。

③ 学習を通して考えたことをまとめる。発表する。
授業者は、事前に書かれた児童の作文を内容項目ごとに分類し全体計画を立てる。学習中に出された児童の話し合いの流れを板書していく。

Ⅳ 考察

学習したことが定着しにくい児童や生活指導上課題のある児童を教師が「困った子」として受け止めるのか、それとも「困っている子」として受け止めるのかで、児童理解に対する考え方が大きく変わる。「困っている子」として受け止めることで児童の内面から理解することができると考える。このような教師の意識変革が、児童理解の幅を広げ、「困っている子」への対応の仕方も変わってくる。児童もまた、教師が自分のことを学力だけで評価しているのではなく、一人の人間として人格ごと受け止めていると感じることで心が安定し、学習に取り組む意欲も高まってくる。

そして、教師は、「児童が何にどのような問題を感じ、何を求め、どのような生き方を望んでいるのか」という視点を持って児童理解をしていくことが大切である。道徳の時間はこのことが直接表れてくると考えられる。「知」と「情」を同時に育む問題解決学習的な道徳の授業では、児童のこだわりや思考の流れが直線的ではなく、多岐に分散していくので、授業記録を取り、それを整理していく必要がある。授業を記録し振り返る授業リフレクションは授業中に気が付かなかった「児童の思考」「こだわり」「教師による児童の発言の取り上げ方」等の改善点を学ぶことができるのではないかと考える。